

きんもくせい

令和7年 学校教育だより

December **12** 第367号

(年4回発行)

編集・きんもくせい編集委員会

発行・埼玉県富士見市教育委員会

電話・049-251-2711(内線623)

編集目標 学びあい 人がつながり 一人ひとりが輝く 富士見の教育



真剣な眼差しと笑顔に満ちた児童

写真提供／水谷小学校

「冬の一日」

本郷中学校 三年

小川

藍

冬の朝 寒さで目を覚ます
白い息を吐きながら歩く
教室の窓に雪が舞う

ノートに文字を書き進める
時々手が止まり
ちらりと窓を見る

帰り道

つま先から鼻先が凍るほど

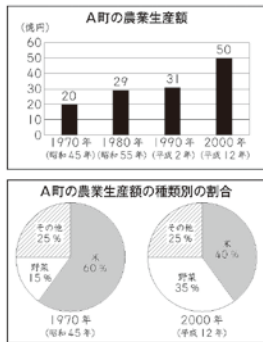
冷たい風の中をゆっくり歩く
あたたかい家が
待っているから

はじめに

一人一台のタブレット端末が整備されてからすでに六年が経ち、日常的に端末を使って学習する子どもの姿がすっかり定着してきた。たくさんの情報があふれている現代、子どもたちには、どの情報を使い、そこから何を読み取るかを様々な角度から考える力が求められている。学校では、子どもたちが「数学的に考える力」を働かせることができる学習活動を行うことが大切とされている。本稿では、この観点に基づき、六年生の算数「データのとくちようを調べて判断しよう」の授業で実践した具体的な取組みを紹介する。身近なデータを集め、表やグラフを整理し、そこから読み取れる特徴をもとに自分の考えをまとめる活動を通して、主体的に学ぶ姿勢の育成をめざす。

① 児童の理解の状況

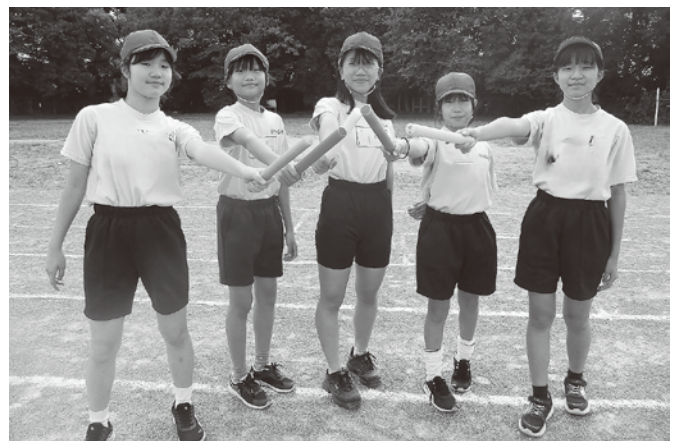
左図の問題は、以前出題された全国学力・学習状況調査である。二つのグラフを見て必要な情報を選ぶ問題が出題された。この問題は、一九七〇年と二〇〇〇年の米の生産量を比べるために、それぞれの都市の農業生産額と米の生産量の割合の両方を考える必要があった。しかし、正答率は一七・六パーセントだった。この結果から、子どもたちは一つの情報から判断することができて、複数の情報を組み合わせさせて考えることが難しいこ



針ヶ谷小学校 6年
相川、上田、関口、真島、諸岡

「私たちの代表リレー」

私たちは、陸上大会のリレーに出場しました。最初は、バトンパスがうまくいかず苦戦しました。どうしてもうまくいかず、苦しかったです。しかし休み時間や放課後の時間をつかって、毎日練習をかさねていくうちに上手になり、最後の練習ではベストタイムを出せました。そして大会当日、練習の成果が出せるか不安でしたが、1位になりたいという思いで走り出すことができました。本当にうれしかったです。練習の成果も出せて、本番でもベスト記録を更新させて2位になることができて感動しました。中学校でもこの経験を活かし、がんばっていきたいです。



要素が関わることを共有しながら学習を進めた。

② タブレットアプリを活用

単元の後半では、考える力をしっかりと確保するためにグラフ作成アプリを使った。アプリでは作ったグラフや表を見ながら、自クラスや他のクラスの特徴を理解し、根拠をもって自分の結論を出す活動を行った。

④ 考える力を育てる工夫

① いろいろな角度から考え、結論を出せる活動

子どもたちが自分で考える必要性を感じられるように、学校行事と関連させて「校内長縄大会で優勝できるか」を題材にした。

優勝を予想するためにどんなデータが必要か子どもたちに問いかけ、さまざまな

とがわかる。そのため、本授業では複数の情報を見ながら考える力を育てることをねらいとした。

② 授業のねらい

授業のねらいは、データをもとに結論を出す際、いろいろな角度や立場から考え、間違いや矛盾がないか確かめる力を育てることとした。目指す子ども像は、「いろいろな角度から考えて判断できる子ども」とした。

③ 研究の仮説

一つの情報だけで判断せず、複数の情報から必要なこと



=水谷小学校 算数科=

魅力ある授業

「数学的活

～データの活用における多面的・批

⑤ 実際の授業の様子

一時間目

授業の導入では、校内長縄大会で自クラスが優勝できるかを予想するために、どんなデータが必要かを子どもたちに出してもらった。

【子どもたちが考えたデータ例】

平均・チームワーク・作戦
ひつかかった回数・分間の記録・昨年の最高記録・他のクラスの数

授業一時間の中で全てのデータを扱うのは難しいため、「二番大事なデータは何か」を

みんなに支えられ、
自分らしく輝く子どもたち

つるせ台小学校 教諭 平川 美穂

特別支援教育

今年度、ひまわり学級には四人の二年生が加わり、さらに賑やかで明るい雰囲気になりました。

ひまわり学級の子どもたちは、「人とかかわることが大好きで、「先生、見て見て！」でできた！」と、元気な声が響きます。うまくいかないことがあっても、友だちや先生と励まし合いながら挑戦を続ける姿に日々成長を感じています。

保護者の方と顔を合わせた時、連絡を取り合ったりする機会も多く、日々の様子を伝え合う中で共通理解を深め、

共に子どもたちを見守っています。放課後の職員室では、ひまわり学級の担任同士が子どもたちの話題でもちきりです。支援員も日々の教育活動の中で深くかわり、子どもたち一人一人の心に寄り添いながら温かく支えています。また、管理職、主幹教諭、交流学級の担任も子どもたちのがんばりを認め、励ましの言葉をかけてくれるなど学校全体で子どもたちを支えています。

多くの大人の温かいまなざしに包まれながら、子どもたちが自分を大切に思える心、自



話し合った結果、子どもたちは「練習回数」と「跳んだ回数」を重視した。それまでの練習記録をもとに、データ整理と分析を行った。



⑥ データを分析・結論

結論を出していくと、「自クラスは優勝できない」という結論が多かった。「なぜ、自クラスが優勝できないのか」根拠を基に議論した。子ども

尊感情を育めるよう日々のかかわりを大切にしています。先生たちや高学年の子どもたちに見守られながら、一年生も少しずつ自分らしさを発揮できるようになってきました。

これからも、好きなことや挑戦してみたいことの幅を広げながら、ひまわりのように明るく、まっすぐに成長していく子どもたちの姿を皆で見守っていききたいと思います。

たちは平均値や最大値などの代表値などをもとに優勝できないと結論付けていた。

2期	3期	4期	結論
平均値 210回	228回	193回	できない
最大値 210回	245回	254回	できない
最小値 162回	211回	58回	99分跳び
最頻値 51回	4回	17回	1人負け
中央値 20回	24回	12回	

おわりに

算数の授業では、「子どもたちがやってみよう」「自分たちで考えてみよう」と思えることがとても大切である。今回の授業では学校行事である長縄大会と結び付けたことで、子どもたちが自然と学習に意欲をもつ姿が見られた。「優勝するには、どんなデータが必要か」という問いから、子どもたちは自分たちで計画を立て、データを整理・分析し、結論を出していった。結果として、子どもたちは「このままでは優勝できない」という結論を出していたが、その後の練習で気持ちを切り替え、これまで以上に意欲的に取り組むようになった。今回の研究では、算数の学習と学校行事を結び付けたことで、クラス全体のまとまりや協力する姿勢も深まり、最終的には長縄大会・高学年の部



長縄大会・高学年の部・優勝

指導・講評

水谷小学校長

大竹 宏治

「必要な情報を取捨選択し、複数のデータを整理・分析し、自分なりの結論を導き出していく」石川教諭の本取組は、これからの情報社会で生き抜いていく子どもたちにとって、とても意味のある授業であると考えます。

今後も算数科を柱として、物事を多面的・批判的に捉え、様々な事象やデータ等を根拠にし、自らの考えをまとめたり、結論を出したりする力を身に付けさせる授業について研究を深めていってほしいと思います。

部活動に感謝

勝瀬中学校 保護者 近藤 泰弘

「お父さん、バッセン行きたい。連れて行って。」ソフトボール部に所属する中三の娘からの意外なお願いに父として一瞬驚くも、心の中で「よし！」と叫んだ。冷静を装い、「急にどうしたの？今までバッセン行きたいと言ってなかったじゃん。」と言うと、「だって、打てないんだもん。」と娘が半泣きで答える。

「バッセン」とはバッティングセンターのこと。三つ上の兄が野球をやっていた関係で娘もよく知っている言葉だ。娘は中学の部活動で初めてソフトボールを始めた。野球好きの父としては嬉しかったが、最初の頃は「バッセン行く？」と誘っても「あとでいいや。」と断られていた。何度か誘ったが断られ、いつしか誘わなくなった。それが急に自分から言い出したのは三年生になって試合に出るようになってからだ。結果が出ないことに焦りを感じて



きたのだろう。ようやく本気で部活動に取り組み始めた娘の姿に成長を感じた。中三の最後の大会でチームは勝ち進むことができた。大きな大会で勝つ喜びと負ける悔しさの両方を味わうことができたのは本当に貴重な体験だった。そんな中、大会期間中も娘の希望で週に二、三回「バッセン」に通った。娘の成長する姿が見られたのも、部活動があったからこそ。先生方やチームメイト、周りの保護者の方々に支えられたお陰である。本当に部活動には感謝しかない。

地域との絆を深める



諏訪小学校

諏訪小学校の運動会と地区体育祭が、今年も元気いっぱい開催されました！

午前中の運動会では、子どもたちが一生懸命に競技や演技に取り組み姿が印象的でした。徒競走、学年競技では、力を合わせて走る楽しさや達成感が校庭いっぱいに広がり、学年表現では各学年で工夫をして、練習の成果を発揮し、応援する保護者や先生たちも笑顔に包まれました。

笑顔を包まれました。午後の地区体育祭では、地域の皆さんと一緒に体を動かして楽しむ時間がありました。子どもたちは元気いっぱいに参加し、地域の方々との交流を通して、協力する楽しさや笑顔の輪を広げることができました。



地域の中で未来を育む

ふじみ野小学校 保護者 井上 未来

次男が小学校六年生となる

本年、「保護者・教師の会」の役員を務め、学校や地域との関わりを深める貴重な機会をいただきました。教職員の皆様が「子どもたちのために」と熱意をもって日々ご尽力くださる姿を間近で拝見し、心より感謝申し上げます。また、長年にわたり通学路を見守ってくださる地域の皆様のおかげで、子どもたちが安心して登下校できていることを改めて感じました。

役員となり、これまで保護者として「見る」立場から、行事等の運営を支える「関わる」立場へと変わり、新たな視点を得る貴重な経験となっています。活動の一環として地域のお祭りに出店した際には、幅広い世代の方々との交流を通して大きな喜びと達成感を味わい、大盛況のうちに終えることができました。長男も中学校からボランティア

として参加し、小さな子どもたちに遊びを教えるなど、主体的に活動する姿を見て、その成長に胸が熱くなりました。

長男が小学校に入学する頃、富士見市に転居しました。すぐに学校にも慣れ、放課後は友達とよく遊びに出かけていました。大きなトラブルもなく安心して子育てができるこの豊かな日常は、多くの方々の温かい支えによって成り立っています。私も微力ながら、役

員活動を通して、子どもたちの成長を見守っていきたいと思います。そして、八年間お世話になった小学校への感謝を胸に、卒業の時を迎えたいと思います。



第50回 東中合唱祭

東中学校

十月十七日(金)キラリ☆ふじみにて、東中学校の第50回合唱祭が行われました。スローガンは『百歌繚乱〜響かせろ半世紀の想い〜』。そのスローガンのもと、どのクラスも一か月以上前から練習に励み、本番では思う存分に力を発揮してくれました。どの学年・学級の合唱も素晴らしく、東中の新たな伝統を築いてくれました。

そして、昨年度から新たな取り組みとして行っているのが歌紹介の「めくり」(下写真参照)です。クラスごとに歌のイメージをふくらませ、担当生徒がそのイメージを絵として表現しています。ステー

ジ脇に飾られためくりと合唱とのコラボレーションは、歌の世界に新たな彩りを加えてくれました。めくりといえど制作する上で注意することがたくさんあります。一番大切なのは遠くから見ても「映える」ことです。広いホールで存在感を発揮させるのは簡単なことではありません。お互い廊下の端に立つて文字のサイズや配色を練るなど試行錯誤しているクラスもたくさんあり、と細かいところまで工夫が凝らされています。よく作り上げた

なと感心するばかりです。学年

の垣根を超えての取り組みは、今年の合唱祭を大いに盛り上げてくれました。

現在、めくりは校舎内の階段に掲示しています。階段を上るたびに合唱の余韻を感じられ、同時に学校をとて明るくしてくれています。来年はどんなめくりが作られるか、そしてどんな合唱祭になるのか、51回目の合唱祭が今から楽しみです。



教育課題特集

夢ときぼうを

消防署見学・職場体験を通じて

入間東部地区事務組合東消防署消防課 吉田 邦雄

消防署では、学習の一環で実施する消防署見学や職場体験で小中学生の受入れをしています。これらは、消防署の役割や業務を知ってもらうとともに、防火・防災に対する理解を深める貴重な機会であると考えています。子どもたちは、指令室や消防車両、資器材等の見学を通じて、日頃どのように消防活動が行われているかを学びます。中学生

の職場体験では、防火装備を着装した煙体験訓練や放水訓練など実際の訓練を通じて消防署の仕事への理解を深めます。

こうした体験は、子どもたちにとって一過性の印象にとどまるものではありません。見学をきっかけに「火遊びをしない」「避難経路を確認する」といった意識を家庭にもち帰り、保護者や家族への注意喚起にもつながっていくと考えられます。実際に「住宅

用火災警報器の重要性を子どもから聞き、設置を検討した」「防災グッズを親子で確認する機会になった」という声も聞かれ、消防署見学や職

場体験は子どもたちを通じて各家庭の防火・防災意識を高める契機となっています。

また、体験を通じて消防士の仕事に憧れを抱く子どもも少なくありません。将来に向けて「消防士になりたい」と夢をもつことは、地域における防災力の継承につながるものであり、次世代を担う人材育成の観点からも大きな意義があります。

消防署と住民の相互理解を深めることは、火災予防や災害時における被害の軽減につながります。消防署見学や職場体験はその第一歩として、子どもから家庭へ、さらに地域へと防火・防災意識を広げる役割を果たしており、住民にとって確かな利益になると考えています。



人間尊重教育推進

わたしたちのまちに

育てよう 広げよう 人間尊重の心

一 富士見市は人間尊重宣言都市です

私たちのまち富士見市は、昭和四十一年に人間尊重都市宣言をしました。

「からだと心の健康を高めよう」

「自分を大切にするとともに、他人を尊重しよう」

「個性をよりよく生かし社会のために役立てよう」

と呼びかけながら私たちのまちを人間尊重のまちにすることを宣言したのです。

二 学校における人間尊重

市内の小・中・特別支援学校では、一人一人の子どもたちに確かな学力を身に付けさせるとともに、人間らしくよりよく生きる心をはぐくむための教育が実践されています。

また、すべての教職員により一人一人の子どもたちが大切にされ、互いに尊重し合い、信頼関係で結ばれた学校づくりが進められています。

三 家庭教育における人間尊重

子どもにとって家庭は、安らぎの場所であり、人間としての生き方を学ぶかけがえのない場です。また、親子のコミュニケーションは、食事が体をつくるのと同じように、子どもの豊かな心をはぐくむこととなります。家庭での温かい言葉かけは、子どもの心を育てる栄養となります。

毎日の家庭生活の中で、やさしさや思いやりなどの豊かな心が育つことを願って「家庭における人間尊重教育十か条」が作成されておりますのでご活用ください。

家庭、学校・行政が力を合わせ、一体となって子どもたちの健全な育成に努力していきましょう。

家庭における人間尊重教育十か条

一 一人のいのちを大切にし

いのちある動物、植物をいたわりましょう

二 健康を大切にし 正しい食事と適度な運動で

からだづくりにつとめましょう

三 おはよう、おやすみ、ただいま、おかえりの

ことが聞こえる温かい家庭をつくりましょう

四 ありがとう、ごくろうさまの素直なことばで

感謝の心を育てましょう

五 家族の仕事を分担し

家族の一員としての役割をはたしましょう

六 人の喜びを喜びとし 人の心の痛みを

分かちあい助けあっていきましょう

七 やさしさ いたわりの心を大切にし

おとしよりの方々に学びましょう

八 どんな物も人の汗と力でできることを知り

物を大切にする心を育てましょう

九 正しくやさしいことばでつつまれた

明るい家庭をつくりましょう

十 正しいことをつらぬく強い心で

勇気ある行動をとりましょう

人間尊重 わたしたちの合言葉

【小学生の部】

差別ダメ 見た目じゃないよ 心だよ

(針ヶ谷小学校 五年 本橋 輝)

ほめことば こころのでんき ともされる

(ふじみ野小学校 五年 久保下 颯太)

入間郡市同和対策協議会 応募作品より
入間地区人権教育推進協議会

【小学生の部】

助け合う その心がけ 思いやり

(諏訪小学校 五年 原田 知沙)

あいさつは 言われるだけで えがおさく

(関沢小学校 五年 塚田 いち花)

【中学生の部】

人権は 人と人との マナーだよ

(富士見台中学校 二年 宮崎 翔)

大丈夫 あなたはあなたで 素晴らしい

(東中学校 一年 平塚 桃嘉)

〔富士見市人権教育推進協議会 応募作品より〕

人間尊重・私の主張

人権問題について

境界線

富士見台中学校 一年 菊地 茉乃

境界線。この言葉を聞いてあなたは何を思い浮かべただろうか。この言葉は主に物事の境目のことを表す。色々な場面に使われるが、私が最初にこの言葉から想像したものは、自分とは違うという偏見から生まれる見えない心の境界線のことだった。なぜこの言葉が思い浮かんだかというと、私の周りにも障害がある人だということ、私下す人がいたからだろう。私はそのように差別して見下すような人を少なくするため同じ人間と知り、皆と変わらない態度で接することが重要だと思う。

私が小学生の頃、友だちと一緒に下校している時のことだ。信号で立ち止まっている五十から六十代ぐらいの男性がいた。その人は右手に白杖を持っている、私はすぐに視覚障害がある人だと気付くことができた。だが、この信号は音響式信号ではないため、もしかしたらこの男性は信号が青になってもわからないのではないかと不安に思った。私はその人に「信号が青になったらお伝えしましょうか。」と声をかけようとしたがすぐにやめた。口を開いた瞬間、迷惑ではないだろうか、自分と年齢がはなれてから話しかけるの怖いなと思うとどまってしまったからである。そしたら隣から、「信号が青に変わったからお知らせしましょうか。」という聞いたことのある声が聞こえた。私はとっさに声のした方に顔を向けると、優しく微笑んでいる友だちの姿があった。そうしたらその男性は頬を緩ませ、「ありがとう。」とその友だちに感謝の気

持ちを伝えた。私はその会話を聞き、いつも年上のように感じていた友だちがより大人びて見えた。その後すぐに信号が青へと変わると友だちはその男性にむかって、「横断歩道をわたるまで誘導しますので、肩に手を置いてください。」と言い、男性がそっと肩に手を置いたことを確認すると男性のペースに合わせて、半歩前に行くようにして歩いた。私はその友だちの完璧な対応に驚き、心の中で自分のことを格好悪い人間だなと思い少しくつむいた。そして二人の後ろ姿を見ながら横断歩道をわたった。その男性とはすぐに別れたが、別れ際に、

「手伝ってくれて、ありがとう。」と穏やかな口調で言われた。私はその友だちではないが心が温まるような感覚がした。

私は障害がある人たちのことを世間の言う当たり前という境界線から少しだけ外に出てしまった人たちのように思う。そして、その人たちのことを中に入っている人たちが偏見の眼差しで見たり、心ない言葉を投げかけ、からかったりしているように思ってしまうことがある。それはとてもよくないことで絶対に誰も幸せにならない。だから私たちはこのような偏見による人がつくった境界線をなくし、全員が幸せでいられる世界に私たちが自分の手で変えていかなければならない。そのためには、まず、その人の当たり前を理解し、お互いの足りていないところを補い合うことが大切だと思う。友だちは視覚障害がある人のことを詳しく理解し、その男性を手伝おうと思ったから助けることができた。つまり、このことを皆が意識すれば偏見による人がつくった境界線がなくなり多くの人が幸せになる世界へと進むはずだ。皆で協力して、境界線の中に入れる人を増やしていきませんか。

《小学校宣言》

私たちは、全校児童が仲良く楽しく過ごせる学校をつくるために、相手の気持ちを考えた行動を心がけ、いじめのない学校を目指し、以下のことを宣言します。

- 一 私たちは、いじめをしている人に「遊び半分で相手を傷つけるようなことをしてはいけません。」と注意します。
 - 一 私たちは、いじめられている人に「いつでも相談してね。一人でかかえこまないで。」と声をかけてあげます。
 - 一 私たちは、いじめを見ている人に「見ているのもいじめだよ。いっしょに助けてあげよう。」と言います。
 - 一 私たちは、お父さん、お母さん、先生たちに「子どもの変化に気づいて助けてください。」とお願いします。
- 私たちは、友だちのいいところを認め合い、いじめがなくなるまで、「いじめはだめだ。」とずっとえ続けます。

《中学校宣言》

私たちは、一人ひとりの個性を認め合える、いじめのない太陽のような学校をつくるために、以下のことを宣言します。

- 一 私たちは、いじめをしている人に「相手の気持ちになって、自分の言動を見つめよう。」と声をかけていきます。
 - 一 私たちは、いじめられている人に「一人じゃないから勇気を出して相談してね。」と声をかけていきます。
 - 一 私たちは、いじめを見ている人に「私たちの一言で救われる人がいるからみんなで助け合おうよう。」と声をかけていきます。
 - 一 私たちは、お父さん、お母さん、先生たちに「一人ひとりちゃんと理解して、よくなかったら注意をしてください。」とお願いします。
- 私たちは、仲間を大切に、いじめを撲滅する努力をします。

教育委員会だより

令和7年度富士見市 いじめのない学校づくり子ども会議

富士見市の小・中・特別支援 では、『いじめのない学校づくり子ども宣言』に基づき、児童...が主体となり、さらに明るく、楽しい学校生活を送ることができるよう、いじめ防止に取り組んでいます。

今年度は、針ヶ谷コミュニティセンターにおいて小中学校代表児童生徒が、いじめのない学校、学級を築くための取組を考える『富士見市いじめのない学校づくり子ども会議』を開催しました。

開催日：令和7年7月22日(火) 9:45～12:00

開催場所：針ヶ谷コミュニティセンター

小学生22名、中学生12名の合計34名の代表児童生徒が、5つの中学校区で真剣に話し合いました。自校のいじめ防止に向けた取組を紹介し、みんなが安心して仲良く生活できる学校をつくるための方法について考えました。

《当日の流れ》

- 1 開会セレモニー
- 2 ディスカッション（小学校・中学校に分かれて協議）
- 3 中学校区に分かれて協議

テーマ

～まわりで起きるいじめをなくすために、何ができるか考えよう～

- ① まわりで起きるいじめをなくすために、何ができるか考えよう。
- ② 中学校区で共通して取り組むためのものを決めよう。
- ③ 話し合った内容の報告（中学校区ごと）
- ④ 閉会セレモニー



各学校のこれまでの取組について意見を出し合いました。



これまでに効果があった取組について意見を出し合いました。



いじめをなくすために必要なことは何かについて話し合いました。

★まとめ★

今回の会議では、「いじめのない学校づくり子ども宣言」を振り返り、改めて、いじめのない学校づくりに向けた取組について話し合いました。

今後の主な取組として、「いじめを他人ごとにししない・させない」「見てだけでなく、支える気持ちをもつ」等のキャッチフレーズや「あいさつ運動」「レクリエーション」等の「いじめをなくすための取組」など、実践的な提案が多くみられました。

今後、会議に参加した児童生徒が中心となって、「みんなが安心して学び成長できる学校づくり」に向けて、各校で具体的な取組を行っていきます。



声がつくる めくもり

鶴瀬小学校 教諭 西澤 美香



校舎から、いろいろな声が聞こえてきます。挨拶の声、友だちと話す声、笑い声、歌声。どの声にも、子どもたちの素直さと明るさがにじんでいます。その声の向こうに、

感じ取ることにあります。自分の声だけでなく、仲間の声を聴き、呼吸を合わせ、互いを生かそうとする。その積み重ねが思いやりや協調性を育み、言葉では教えられない大

日々の挨拶や友だちとの会話の中にも、互いを思いやる心が息づいています。そうした小さな声の積み重ねが、この学校のあたたかい空気をつくっているのだと感じます。

声は、心と心をつなぐ架け橋。子どもたちのまっすぐな声が響くたびに、私は“生きる力”のようなものを感じます。一つ一つの声が重なり合い、あたたかな響きを生み出す。その姿は、この学校の姿にも重なります。子どもたちの内にある輝きを伸ばし、互いの声が響き合う、いきいきとした日々を紡いでいきたいと思っています。

今日もまた、子どもたちの明るく人懐こく、優しさやあたたかさに包まれた元気な「声」が未来へと響いていきます。

編集日記

放課後、本校の校庭は、学童保育の児童や仲間と連れ立って遊びに来る児童などで大賑わい。「子どもは風の子」という言葉は健在だなあと嬉しくなる光景が広がる。しかし、昔と違うところは、「ヘルメット」を被って自転車に乗ってくる児童がほとんどであること。

自転車の一定の交通違反に令和八年四月から「交通反則通告制度」が導入されるそう。このため、警視庁では「自転車を安全・安心に利用するために1自転車への交通反則通告制度（青切符）の導入」をこのほどまとめたそうである。内容として

- ・青切符導入の背景と手続き
- ・基本的な交通ルール
- ・交通違反の指導取り締まり
- ・青切符以外に自転車で交通違反をした時に受けることがある処遇 等である。

この制度は十六歳以上の者による反則行為のほか、わかりやすく解説されており、高校生以下の交通安全教育にも役立つそうである。

自転車関連事故数は高止まりと言われているが、児童生徒の自転車事故リスクは高いと言われている。あらゆる年代で確認していきたい。

(関口循子)